みんなが大変だった時

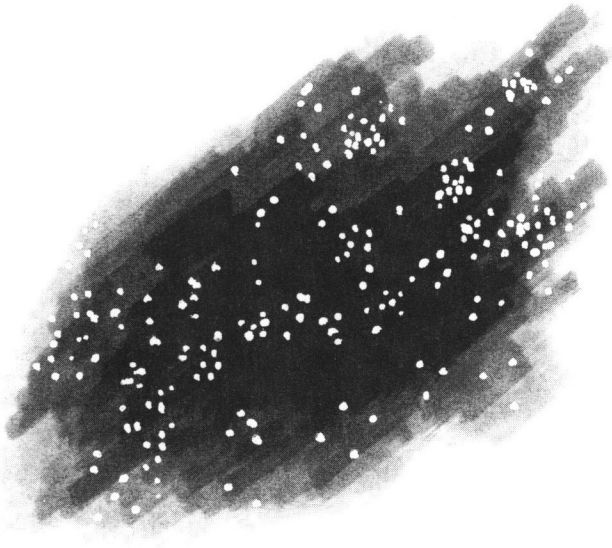
北村長子
中野一丁目

中野区の谷戸運動公園は、以前は田島さんの庭にある池で、まわりの土手に植木などが繁って、子供達のかくれて遊ぶところでした。

昭和二〇年五月二五日の大空襲、雨が降るように焼夷弾が投下されて、あちらこちらが大火災になりました。北村の母は足の弱い姉をつれて、とても火の海を逃げられないので、近くの田島さんの池に姉と二人で入り、火の粉がふってくるので頭に池の水をかけては、念仏をとなえて助かりました。父と兄は消火活動をしていましたが、逃げのびて明け方に煙の中の焼け跡に戻って来て再会しました。泥だらけのススでまっくろの顔、涙も出なかったと母からよく聞き、今でも悲しい思いで胸が痛みます。

防空壕での生活、強制的に家をこわしてあるところから、柱や板などをもってきてバラックを建て、焼け跡の土を深く掘り返して、南瓜、とうもろこしなど食べられる野菜を作りました。大人も子供もよく働く。北村では長野の親類から山羊を一頭もらって山羊の乳をしぼり、子供達はメエーメエーと笑いながら飲みました。とても濃くて美味しかった。

ドラム缶の上を切って、お風呂桶をつくる。お湯の上にたて横に組み合わせた板を入れて、静かに足を中心にのせて入りました。廻りは戸や板で囲ってあるが、外なので女の人は、誰かに立っていてもらって入浴しました。石ケンもなくただドボンと入るだけでしたが、きれいな星空は今でも思い出します。

五月の空襲の時、強風と炎の中を、近くに住む方で、妹さんが赤ちゃんを背負い、母親が四歳の女の子の手を引き、おばあさんを二人連れてもみじ山に逃げる途中、何度もねんねこ半てんに火がついたのを消しながら、煙の中を苦しんでやっと助かりました。女の子は炎に顔を煽られて真っ赤にふくれて大きな顔になっていましたが、だんだんとよくなって、今は火傷のあともなくよかった。この子のお兄さんは谷戸の生徒で、長野県諏訪へ学童疎開にいっていました。空腹で我慢できず、自分の持っている物の中で歯ミガキ粉や工作ののりを食べたりして、

やせほそっていると親戚の叔父さんが面会にきて、心配して連れて帰りました。自宅でも食物がないので、遠くの土手や野原までいって、色々な野草をとっては料理して食べました。この息子さんは初めて車を買った時、一人で運転して、学童疎開をしていたところへ行ってきたそうです。どのような思い出があったのでしょうか。もう戦争はいやです。